「知行合一（ちこうごういつ）」を胸に～ＡＩ時代に向けて

令和5年4月に開始した本ブログも、今回で 38 回目となりましたが、勝手ながら、一身上の都合により今回をもって最終回とさせていただきます。略儀ながら、ご覧いただいていた皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、本ブログの第1回は、「至誠惻怛（しせいそくだつ）」をテーマとしましたが、最終回は、第1回にちなんで王陽明の「陽明学」関連で終えたいと思います。冒頭の「知行合一」は、「知は行の始なり、行は知の成るなり」（「伝習録」より）を要約した言葉で、知識は行動と一体なって完成するというような意味です。

この陽明学の思想は、「大塩平八郎の乱」で有名な大塩平八郎や、吉田松陰など幕末の志士、あるいは第1回のブログでも登場した山田方谷（ほうこく）や河井継之助などにも大きな影響を与えたことでも有名です。江戸（徳川）幕府は、朱子学を幕府公認の学問としていましたので、ある面で、朱子学のアンチテーゼとも言える「陽明学」は、反主流的な学問だったと言えます。しかし、幕末の志士など現状の変革を強く志向する多くの人達を惹きつけてやまない思想であったものと思われますし、そういった意味では、幕府にとっては、一種の危険思想でもあったわけです。一方、山田方谷や河井継之助は、どちらかと言えば幕府側の人物ですが、政治や社会の現状に課題を見出し、それを変革しようとした点では、同じベクトルにあったのではないでしょうか。

翻って、現代社会に目を転じると、産業化、情報化、国際化など社会の基本構造は当時と比べ大きく変容しているとはいえ、政治、経済、社会などの大きな変革期に差し掛かっているという点では、当時と似通った時代状況にあるのかもしれません。そして、その最大の要因の一つは、まさに現代の「黒船」とも言える生成ＡＩの登場です。

人類は、農業革命による定住化、産業革命に端を発する産業化、インターネットの普及等による情報化など、これまで大きなパラダイムシフトを経験してきたわけですが、これらは、基本的に人間の作業や労働を簡素化、効率化し、その作業領域の拡大などに大きく貢献するものでした。これらにより、徐々に第一次産業、第二次産業そして第三次産業へと労働力がシフトしたわけですが、いずれにしろ、こうした事柄は、人間の作業や労働を何らかの形で支援するものだったのです。一方、生成 ＡＩは、人間を支援する側面だけでなく、人間に取って代わる性質を有するものでもあるということです。この生成 ＡＩの持つ懸念や疑念等に関しては、昨年 10 月の本ブログで「NEXUS 情報の人類史（上・下）」をご紹介しながら取り上げたところでもあります。

とはいえ、今後とも生成 ＡＩはますます進歩するでしょうし、利用もさらに拡大していくものと思われます。試しに、生成 ＡＩにある課題を投げかけてみると、その情報処理速度、内容の正確性などに大変驚かされます。それでは、我々はこの事態にどう対処したらよいのか。もちろんそんなに簡単に答えの出るものではありませんが、その答えの一つとして、冒頭の「知行合一」が一つのヒントになるのではないかと思います。なぜなら、現在の生成 ＡＩは、基本的に一次情報（自分が直接体験したり、調査や実験を行ったりして得た独自の情報）は持てないという弱点があるからです。仕事で言えば、現段階の生成 ＡＩは、現場の作業はできないし、それに伴う「現場の知恵」も持ちえないのです。「知行合一」とは、まさに知識と行動の融合であり、これからの ＡＩ時代を生き抜いていくためには、現場で蓄えた知識や経験を実践していくことがますます求められるものと思います。今後とも、当財団の職員の皆さんが、現場で培われた知識等を、仕事で実践し、継承していくことを切に願い結びとさせていただきます。

令和8年（2026 年）5月

一般財団法人　かながわ水・エネルギーサービス
理　事　長　　松　井　　聡　明